届け 世界の果てまでも

令和４年６月３日　Ｎｏ．１５　文責　校長　飯久保一男

価値観

２人の母親の家庭の朝の様子です。　※実際の例ではありません。

母親Ａ　パート勤務をしています。朝は子どもたちより早く起きて，家族の朝ご飯をつくります。子どもたちが起きてきたらすぐに朝ご飯を食べられるように準備をします。子どもたちが学校に出かけるのを見送ってから仕事に出かけます。このことは母親のあるべき姿だと思っています。

母親Ｂ　夜遅くまで働いています。夜に，翌朝のご飯の準備をしています。朝，疲れや睡眠不足で起きられないときもあります。子どもたちはそんなときは前の晩に母親が準備してある朝ご飯を温め直すなどして食べて，学校に出かけます。自分が起きなくても自分たちで朝ご飯を食べて出かけて行く子どもたちは，この母親の自慢です。

この母親Ａと母親Ｂが，朝の母親の理想の姿を話し合ったとしたら，平行線で話がかみ合わないかもしれません。一言でいうと，価値観が違うのです。価値観の違う人と話をしたり，付き合ったりするときは，相手の価値観を否定しないほうがうまくいくのは世の常です。ただ，これは大人どうしの場合であって，子どもの場合は違ってきます。子どもは様々な価値に出会って，自分なりの価値観をもっていきます。小学生はその途中です。そして，そこに一番大きな影響を与えるのは親です。

父親よりも母親のほうが「自分が産んだ」という感情から，自分と子どもを一心同体のように感じてしまう傾向が強いそうです。しかし，親と子どもは別の人格です。子どもは子どもなりに少しずつ価値観をもち，人格を形成していきます。「子どもにこうなってもらいたい」と強く願う親ほど，自分の価値観からはみ出した子どもに対して，強制的に戻させようとする傾向があるようです。

自分で判断をしないで，他の人に決めてもらう経験の多い子どもは，すぐに誰かを頼ります。親がよかれと思って，あれこれと手を出し，口を出すことは，結果的には，子どもの判断力や決断力を奪い，価値観を強制してしまい，大人になってからも誰かに頼って生きていくようになってしまうことにつながると心理学者は言います。子どもに「～しなさい」といった指示や命令の言葉をよく使う親は，子どもの「できていない部分」に意識が向いているそうです。その結果，子どものネガティブな部分ばかりが気になってしまい，手を出し，口を出して，子どもの価値観に影響を与えてしまうとのことです。

大人であっても完璧な人間ではないと思います。親も子どもも，そして教師も未熟な部分をもち合わせています。こう考えると，子どもが「別の人格をもった一人の人間」であると理解できます。

本校の子どもたちは，道徳の学習の中で様々な価値を学んでいます。そのほかの学習や活動の中でも，価値を身に付けていきます。教師による価値観の押し付けとならないように気を付け，子どもたちなりの価値観で，自ら考え，判断できる学習や活動となるよう取り組んでいます。

＜Ｓさん（４０歳）の体験談＞

結婚して２年目のことです。

高齢出産で生まれた長男にいい生活リズムをつけなくてはと，朝から夕方まで，毎日，散歩に出たり，児童館などに連れて行ったりしていました。実家も義実家も近くはなく，実母がときどき助けにきてくれてはいたものの，夫は仕事が忙しく，一人での育児の日々が続いていました。若くもなく，初めての育児だった私は，正直てんてこまいで疲れていました。

毎日のように近くの大型スーパーに寄り，たくさんの人の中で孤独を紛らわしていたある日のことです。男子高校生たちと同じエレベーターに乗り合わせました。彼らはエレベーターの中でも大きい声でしゃべっていました。私は「やっと寝た子どもが起きちゃうかもなぁ。」なんて，少しもやもやした気持ちを抱えていました。

ところが，エレベーターから降りようとベビーカーを押しかけたとき，一人の男子高校生が降りやすいようにドアを押さえてくれたのです。それだけではなく，私が「ありがとうございます。」とお礼を言いながら降りようとしたとき，ベビーカーの中の我が子の寝顔を見て

「やっべ，マジ天使。」

と小さめで，うつむきながら言う声が聞こえました。

その言葉と紺色の制服が忘れられません。瞬く間に過ぎていく毎日の中で，辛くても「我が子のため」孤独でも「みんな同じだから」と，いろんなことを飲み込んで我慢してきた思いが，さっと消えていくような，そんな気持ちになりました。

少し恥ずかしくて，笑顔を浮かべるだけで何も言えないままエレベーターを降りてしまいましたが，

「そうだよな，我が子は天使なんだ。手がかかる困ったちゃんじゃないんだ。大事にしなくちゃ。」

と改めて思わせてくれた出来事でした。

その後，２年空いて，長女も生まれ，また毎日がさらに騒がしく大変になりました。ですが，あのときの言葉と，彼らが着ていた紺色の制服と，ベビーカーの中の我が子の寝顔を思い出して，がんばれています！　ありがとう！

５月２５日　Yahoo ニュースより

息子たちが子どものころ，妻が「私の子どものころはこうじゃなかった」と言っていました。
妻は引っ込み思案で，家にお客さんがくると，別の部屋に引っ込んでいたと言います。
しかし息子たちは，大人の来客でも喜び，おしゃべりをし，遊ぼうとしました。
遺伝の問題かもしれませんが，息子たちのこの姿に影響を及ぼしたのは，
母親である妻ではありません。間違いなく，父親である私です。

むむっ，私が子どものころ，亡き父が母に「コイツを黙らせろ」と，私のおしゃべりが過ぎるのに閉口していたことを思い出します。